閑話休題

しづや　りふかふ

画家は憂鬱な表情で頬杖を突いていた。ロック・バンドをやっている友人が訪ねてくる。

「どうしたんだ」

「いや」

「元気がないぜ」

「そう？　たぶんメランコリーさ」

「見りゃあわかる。どうして憂鬱なのか訊いてるんだ」

「そうだね…。虚しいのさ」

「何が」

「いいか、どんな名作を画いても僕は死んでしまうんだ」

「そりゃあそうだ。仕方ないだろ」

「偉大な名作を遺せば僕の魂は生きる、生き続けると考えていた」

「なるほど。確かにそうかもしれない」

「でもそんなの虚しい。僕の人生は終わる。それにそもそも名作を残したい、魂を遺したいというのは生への執著の一つのあらわれ、一つの形態、変形版に過ぎない。人生が終わって灰燼に帰すならその想いは虚しい」

「どうすりゃあいいんだ」

「わからない。仮に名作を残すのが有意義だとしよう。世の人が喜ぶとしよう。しかし人類もいつか滅ぶ」

「そこまで考えると病気だな」

「いや。事実だ。世間が脳天気過ぎるのさ」

「いやいや。そういうのが病気なんだ。本人には全く理窟が合っているとしか思えない、それが特徴だ」

「君はどうして無事なんだ」

「そうでもないさ。そういう気分もある。そうでないときもある。だいたい、体調だね、原因は。胃腸系かな。二十歳過ぎてから体が変わったよ」

「フィジカルだな」

「俺たちゃ物質の塊だぜ。なあ、バンドを始めた頃、楽しくって余計なことは何も考えなかった。考えられなかった。それでいいんじゃねえか。理屈じゃねえ。生きてるんだ。なあ、そもそも死ぬ一瞬を気にして数十年の人生を憂鬱に過ごすのも理不尽だろ」

「僕もそう思ったときもあったさ。でもそんなもんじゃないんだ。もし余命を宣告されたらそんなもんじゃないってことが

わかるよ」

「宣告されたのか」

「いや」

「じゃ、いいだろ」

「ふ。埒が開かないな」

「あの世でまた絵が画けると想ってりゃあいいのさ」

「あの世がなかったら?」

「さらに気にする必要がないじゃねえか、何もないんだからな」

「お気楽だな」

「おまえの方が根拠のない妄想を言ってるのさ。そもそも憂鬱って何だ。そいつを手に掴めるか、齧れるか、持って来てみな。おまえの妄（おも）いだけさ」

「…ふ。くだらないオチだな。達磨和尚と慧可和尚か※」

※　達磨安心（だるまあんじん）『無門関』第四十一則より抜粋

達磨面壁す、二祖、雪に立ち、臂を断つて云く、「弟子、心未だ安んぜず、乞う師安心せしめたまえ。」　達磨云く、「心を将（も）ち来たれ、汝が為に安ぜん。」　二祖云く、「心をもとむるに了（つ）いに不可得なり。」　達磨云く、「汝が為に安心せしめ竟（おわ）んぬ。」